○そゝしき玉　むかし唐土に燕といふ國のみかどあつき時に向へは涼しくなる玉を得給へり其玉の物を照をと月にたとへたり朝詠に燕昭王招涼之珠當三沙月一兮自得と云へり

秘　そらはれていさごをてらす月の色をそゝしき玉の影かとぞみる

○そめ色時　夕ぐれ也○そゝむし　侍從のから名也○そゝしき道　極樂世界に生るゝなり

○そゝろぎかく　かたちをつくる樣也心のうかれたる也○そゝり　硯は文珠の眼なりといへり故にまなこ石といふ是によつて硯の面に物をかゝぬものなり○そゝけはな　夕がほの花の事也○そゝたれ　そゝけたる也○そゝくれ草　松の異名なり

藏　鳴せみは山の高みに聞ゆなる涼くれ草の風の夕暮

よみ方

○俊成卿云。哥はかならずしも才覺をふるひて繪師の繪の具とつくし。作物司の木の色をさまゝにわりすへたる樣にはあらざるへし。たゝかみあげうちながむるにけにとれはなてをかしくも聞ゆるそがたなん有べき

○定家卿云。心はあたらしく詞はふるくよむべし。ことばは三代集を出べからず。風躰は古今遠近を論せそして先達堪能の秀歌にならふべし

○同卿云。つねにふるき哥の景氣を觀念してゝろに染おくべし。

○同卿云　和哥に師匠なし。只ふるきうたを師とし心を古風にそめ。詞を先達にならふ誰か詠せざらんや。

○同卿云　哥はよむ事のかたきにあらずよくよむことのかたきなり

○公任卿云。凡哥は心ふかく姿きよげにてをかしきところあるを。そぐれたりといふべし。こと多くそへてさりてよみたるはわろきなり。一ぞにそがたすくよかなるべし。姿こゝろわらでそる事かたくば。先心をとるべし。其そがたといふは打ぎゝ聞よげにてゆえありて哥ときこえ。もじはめづらしくそへなしたる也。いにしへの人多くは哥まくらを置て。そへにれもふ心をなんあらはしける。

○同卿云。凡詞いやしくあまりれいらかなることばなどをはからひて。そぐれたるにあらずはよむべからず。かも。らし。べら。抔ふるき詞つねにはよむまじ。

○八雲御詠に順德帝第一に。うたのかき樣は只そくに艶なるべきなり。しかるを此躰心にまかせていひがたきゆへに。心こもりて艶なるは第二なり。艶ならんとそれば心たらず。心をぐならんとそれば艶ならざる也。只艶ならずといふとも。こゝろをたしかによむべし。かへそゝもやさしきをのみは好べからず。

○院の御口傳云。後鳥羽帝大和うたを詠ずるならひ。昔より今にいたるまで人のいさめに

もしたがはぞ。みづからたしなむにもよらぞ。唯天性を得たるともておのづから風情の妙なるをめぐらぞ。しかはあれども善惡こゝろにあらぞ。進退ときにしよる。其中のぞがたまち〳〵にして。一隅をまもりがたく。或はうるはしくたけあるぞがた有。或はやさしく艶なるあり。あるひは風情を宗とぞるあり。或はぞがたを先とぞる有。これによりて心をのぶればぞなはち言葉つきぞ。姿をとればおのづからはれがたし。

○同御口傳云。まだしきほどに万葉集みたる折は百首のうた半は万葉集のことばよまれ源氏等のものがたりみたる折はまた其樣になるよく〳〵心得てよむべき也。

○俊惠法師云。哥は五尺のあやめ草に水をかけたるやうによむべし。

○鴨長明云　はれのうたは必人に見合ぞべき也我こゝろひとつにしてはあやまりあるものなり。

○安倍清行云　花にはいくたびも。よしのゝはつせ。志賀の里。紅葉には。龍田。月にはさらしな伯母棄。清見。あかし。廣澤難波江これにてたりぬべし。遠くもとむるにおよばぞ。

○俊頼云。大かたの歌のよしといふ心をさきとしてめづらしきふしをもとめ。詞をかざりてよむべき也。心はあれども詞のかざりぞもさせるふしなければよしとも聞えぞ。めでたきふしあれども優なる詞なきは又わろし。

○寂蓮法師云。和歌はをかしきものなり。かるもかく臥猪などいへば。をぞろ〳〵しきものゝやさしく聞ゆるなり。

○爲家卿云。歌はひとつ橋をわたる樣によむべし右へも左へもおちぬ樣に斟酌して心のまゝにはよむべからぞ。

○阿佛尼云。哥をよまん人はことにふれ情を先としてもの、あはれをしり。花のちり木のはのおつるをも露しぐれの色のかはる折ふしをも。目にも耳にもとゞめて。歌のふぜいを立居につけて心にかくべきにて候らん。

○祝部忠成云。たゝうたはあを雲にむかひて案ぞべし。初心のうち草紙などみて古哥にかゝりてはうるはしきうたよみには成べからざる也。

○行家卿云。初心なる時はつねにこひのうたをよむべし。それが心もいでき詞をもいひなるゝなり。

○頓阿云。哥は風雲草木の興にうちむかひて案ぞべきにや。古歌の材木にてはじめよりよまんとせむはよきうた出來べからぞ。但先達の哥にむかへるこゝろ又よめるぞがた詞みならはんためにつねに見侍るべし。一向にみて用なしと申も。又ものをみたる才覺にて讀べしと申ぞも。ともにたがひ侍るべきか。天台に聞證法師文字法師ともにきらへるがごとし。

○堯孝云。歌は上の句にことばをつくし力を入れば。下の句かならぬよはりて見にくし。
○耕雲云。初心のときゑひて面白き哥をよまんとそるは移し田の苗みじかきとてぬきあげて長せさせんとそるがごとし。かへりて根からかるゝものなり。只何首もそら〳〵とよめるうちに秀歌も出來るもの也。
○三光院殿云。上手のよめる哥はぜいぶんふるき詞かはつきりとあたらしくきこゆるなり。
○熊齋細川侯云。この頃にては。後柏原院御哥。逍遥院殿のうたを見るべきなり。むかしのごとく哥をぬらりとよむ事はならぬとみゆ。又時代のちがひにてうたこまやかになりたりとも見えたり。時代の分別肝要の事なり。
○光廣卿云。人のしらぬ事をつよくしたがるはわしきなり。それはいつものことでからおもしろき事ならぬ或はめづらしき手爾葉よみなどそるなり。ひとの不審そる樣によむは。下手なりまぎらかし物也。
右に載たる條とはみな先達の一字千金のをしへなれば。言葉はみじかけれど其こゝろ深し。和哥の道にわけ入んとそる人。よく〳〵味ひてこの則をまもりて。よみかたをしるべし。
○六義

一風といふそへうたなり物をものにそへてよめるなりその事をいはで其心をさとらそといへり
難波津に咲やこの花冬ごもり今は春べと咲や此花
これは仁德天皇の位をゆぜりおへぜして難波の宮にれはしまそを王仁かそへよめるなり早可二踐祚一といへる心なり
二賦はかぞへうたなり物にもたとへぜしていへり
咲花にれもひつくみのあぢきなさ身にいたづきのいるもしらぜて
古今云五にたゝことと哥といへるなんこれにはかなふべきとしるせり
三比はなづらへうたなり物になづらへたるなりたとへばたとへたるといふもおなじ事也
君にけさあしたの霜におきていなば戀しきごとに消やわたらん
古今には此哥かなへりとも見えぜとてしるせる哥
たらちねの親のかふこのまゆごもりいぶせくもあるか妹にあはぜて
四興はたとへうたなり
わかこひはよむとも盡ぜ有磯海の濱の眞砂はよみつくそとも
古今にそへ哥に同樣なれどそこしさまをかへたりといへり

そまのあまの藻焼けふり風をいたみ思ぬかたにたなびきにけり

五雅はたゝことうたといへり

いつはりのなき世なりせばいかばかり人のことのはうれしからまし

古今にこれはことのとゝのほりたゝしきといふなり。

山ざくらわくまで色を見つるかな花散べくも風ふかぬよに

これらがかなふべきといへり

六頌はいはひ哥也

このとのはむべもとみけりさきくさのみつばよつばに殿作せり

是はよをほめて神につぐるなり此うたいはひうたとは見えぬと古今にいへり。

かもがのにわかなつみつゝ万代といはふ心は神ぞしるらん

これやそこしかなふべからん

八雲御抄云今案に貫之おほよそ六くさにわかれんとはいあるまじきことゝいへり。誠に六義に様をかへん事は難し分歟但それもやうによりてことによるへき事也

○和歌諸體

短歌

舒明御製

やまとには　むら山あれど　とりよろふ　あまのかぐやま　のぼりたち　くにみをすれば　くにはらは　けふりたちこめ　うなばらは　かまめたちたつ　おもしろき　國そ秋津島　やまとの國は

長歌

白内阿躬恒

ちはやぶる　神無月とや　けさよりは　くもりもあへぬ　はつしぐれ　紅葉とともに　ふるさとの　吉野の山の　山あらしも　さむく日毎に　なりゆけば　たまのをとけて　こきちらし　あられみだれて　霜こほり　いやかたまれる　庭の面に　むら〳〵みゆる　冬ぐさの　うへに降ぬく　しら雪の　つもり〳〵て　あらたまの　年をあまたも　そぐしつるかな

旋頭歌

三十一字に今一句とそへたる也普通の哥は五句是は六句なり初五七五はなべての哥のやうにて其後七字句或は五字句をそへたるもありまた上句五七々下句なるも有さて七々はなべてのうたにかはる事なし

君がさそ見かさの山のもみ葉の色神無月しぐれの雨のそむるなりけり

混本歌

三十一字のうち一句なき也

朝がほは夕かげまたぬ散やすき花の名ぞかし

廻文歌

是はさかさまにもおなじさまによまるゝなり

むらくさに草の名はもしそなはらばなぞしも花の咲にさくらん

無心所着

たゝそゝろことなりあしくよめば其そがたもなきもの也

わきもてがひたひにおふるそぐろくのことひのうしのくらのうへのかさ

俳諧歌

古今千載などに入たる歌は物狂の事なればさやうのうたをいふにやあらん

秋の〻になまめきたてる女郎花あなかしがまし花も一時

折句

毎句の上に物名を一文字づゝおきたるなり

から衣幾つゝなれにしつましあればはるゝぐきぬる旅をしぞおもふ

とぐら山みねたちならし鳴鹿のへにけん秋をしる人ぞなき

是はかきつばた。をみなへしなり

折句沓冠

是は毎句上下に文字を入たるなり

はかなしな小野のをやまだつくりかねてをだにも君はてをはふれぞや

是は花をたづねてみばやといふ事をいへり

沓冠

始おはり其字とさだめて置なり文字は一も二も三も心にまかせてこれを詠ぜ

はなのながめにあくやとてわけゆけば心ぞともにちりぬべらなる

物名

これはかくし題なり物の名をかくしてよむ哥なり

くきも葉もみなみどりなるふかせりはあらふねのみやしろくみゆらん

あらふねのみやしろと云事をかくせり

雑躰

異躰ともいへりたとへはやう〳〵雑躰をよむ也定たる名もなけれとも人々のおもふまゝに

今もいにしへもよむなり無二同字一哥とて

世のうきめ見ねぬ山ぢへいらむにはおもふ人こそはだしなりけれ

又なぞ〳〵の樣なりあなこひしといふ心を万葉に

ねづみのいゑよねつきふるひ木をきりてむきゝりいだそよつといふかこれ

連歌

むかしは五十韻百韻とつゞくる事はなしたゞ上句にても下の句にてもいひかけつればいまながらを付けるなり今の樣にくさる事は中頃よりの事也賦物なども万葉卷八に

尼

さは川の水をせきあげてうゑし田を

大伴家持

かるはついひはひとりなるべし

或人のいへるに

人ごゝろうしみつ今はたのましよ

良峯宗貞

夢にみゆかとねぞすぎにける

天暦御製

又

さよふけて今はねぶたく成にけり

滋野内侍

ゆめにあふべきひとやまつらん

㊀歌の病

哥のやまひといふ事いにしへより歌式に出たる名目多けれども。歌合の外はしひてさらはぬよし也。されどもつねにもきらふべきは同韻病同字病のふたつなり。是も秀逸の作にはゆるせる例もあれど初心はかたくはゞかりて讀まじき也同韻病は上の句下の句とまりの同字になるをいふ同字病とは第三句のとまりと第四句のとまりとおなじきをいふなり喜撰式にいでたる四病といふは一に曰岸樹病第一句のはじめと第二句のはじめとおなじきなり

夏ふかく成ぞしにける大荒城の森の下草おべて人かる

なつふかくのなとなりぞのなと同しき也

二に曰扈燭病　毎句第二字と第四五字は同しきなり

うぐひすの谷より出る聲なくば春くることをたれかさらまし

是うぐひすのくと聲なくのくと同しき也

三に曰浪舩病　五言の四五字七言の六七字重なるなり

花だにもちらでわかる、春なちばいとよくけふは惜ざらまし
是はつくる、又はあきの、のなど詞のかさなるなり
四に曰落花病　毎句同字まじはるなり
ほのかにぞ鳴わたるなるほと、ぎすみやまを出るにはの初こゑ
是はわたるいづる毎句れなじことまじるなり
又八病といふは
一に曰同心病　同事の二句にあるなり
さかざらんものとはなしに櫻花おもかげにのみまたきたつらん
是らん二あるをいふなり
二に曰乱思病　是は詞優にしてそへよめるなり
いにしへの野中の清水見るごとにさしぐむものは涙也けり
三に曰欄蝶病　是は上の句巧にして下句疎きなり
夏の日の暮るもしらぬなくせみはとひもしてしがおに事かうき
四に曰渚鴻病　是ひとへに題にひかれて詞ふ勞なり
くれの冬わか身老ゆきこけのはふえだにそおふるうれしけもなく

五に曰花橘病　是そなはにして直にその本名を用ゆる也
冬くれば梅に雪こそふりかゝれいづれの枝を花とは折らん
六に曰老楓病　一首の中に思詠を籠ざるをいふなり
七に曰中飽病　これは三十五六字あるなり
八に曰後悔病　すみやかによみおはりて後に悔む心あるなり
○制の詞　ぬしある詞ともいふ
むかしの哥の中にて秀逸のことばなり又當時にても作者のはじめてよみ出てめづらしき金玉のことばは其人ひとりのものにしてかさねてよむまじき也順德院の御製にかひがねは山のそがたにうづもれてとよませ給ひしを京極禪門山のそがた建保の比の秀題とて聞び候としるして難を申あげ奉られしと也制の詞とて耳底記に出たるは

春之部

かそみかねたる　家隆
今朝みれば雲もさくらも埋もれて霞かねたるみよしの、山
花のやどかせ　同
おもふどちそことともしらぬ行くれぬ花の宿かせのべの鶯

うつるもくもる
難波がたかすまぬ涙もかすみけりうつるもくもる朧月夜に　具親
あらしぞかすむ
相坂や木ぬるの花を吹からにあらしぞかすむ關の杉むら　宮内卿
月にあまきる
山たかみみねのあらしにちる花の月にあまきる明がたの空　さぬき
霞にれつる
くれてゆくはるのみなとはしらねども霞におつる宇治の柴舟　寂蓮
むなしき枝に
よし野山花のふるさと跡たにてむなしき枝に春風ぞ吹　攝政
花のつゆそふ
駒とめて猶水かはん山吹の花の露そふ井出の玉川　俊成
花の雪ちる
またや見むかたのゝみのゝ櫻がり花の雪ちる春のあけぼの　同
みだれてなびく
はる風のかすみ吹とくたにまよりみだれてなびく青柳の糸　大輔

雪の玉みづ
山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえぐかゝるゆきの玉みづ　式子内親王
そらさへにほふ
よしの山花のさかりやけふならんそらさへにほふ峯のしらくも　守覺法親王

夏之部

涙にはなる、
霞たつ末の松山ほのぐと涙にはなる、よこ雲の空　家隆
涼しくくもる
かゝれつる野もせの草のかげろひて涼しくくもる夕立の空　西行
あやめかをる
うちしめりあやめぞかをる郭公鳴やさつきの雨の夕ぐれ　攝政

秋之部

きのふはうすき
小ぐら山しぐる、ころの朝なくきのふはうすき峯のもみぢば　定家

ぬるともをらん　家隆

つゆしぐれもる山陰の下もみぢぬるともをらん秋のかたみに

ぬれてやひとり　同

下もみぢかつちる山の夕時雨ぬれてやひとり鹿の鳴らん

かれなで鹿の　知家

あらち山色かはりゆく秋風にかれなで鹿の妻を乞らん

尾花なみよる　俊成

うづら鳴まの、入江の濱かぜに尾花涙よる秋のゆふぐれ

露のそこおる　式子内親王

跡もなき庭のあさぢに結ぼほれ露のうこなる松虫の聲

月やとしまの　家隆

秋のよの月やをしまの天の原明がたちかき沖のつりふね

色なる波に　俊成

明日もみむ野路の玉川萩こえて色なる波に月やどりけり　後鳥羽院

玉川のきしの山吹かげみえて色なる波にかはぢ鳴也　寂蓮

霧立のぼる

むらさめの露もまたひぬ槇の葉に霧立のぼる秋の夕暮　さぬき

わたればにごる

ちりかゝる紅葉の色は深けれどわたればにごる山川のみづ

冬之部

わたらぬ水も

立田川嵐やみねによはるらんわたらぬ水も錦たゆけり　宮内卿

こぼりて出る

志賀の浦や遠ざかりゆく浪間より氷て出る有明の月　家隆

あらしにくもる

小はつせや峯のときは木吹しをり嵐にくもる雪の山本　定家

やよしぐれ

やよしぐれ物おもふ袖のなかりせば木の葉の後に何を染まし　慈圓

雪のゆふぐれ　定家

駒とめて袖うちはらふ陰もなしさの、渡の雪の夕ぐれ　攝政

戀之部

雲ゐるみねの　もらそなよ雲ゐるみねの初しぐれ木の葉の下に色かはるとも　崇德院

われても末に　瀬をはやみ岩にせかる、瀧川のわれても末にあはんとぞ思　定家

みを木がしらの　きゝびわびぬうつろふ人の秋の色に身をこがらしの森の下つゆ　讃岐

袖さへ涙の　みるめこそいりぬる磯の草ならぬ袖さへ涙の下に朽ぬる　後鳥羽院

ぬるとも袖の　わがこひは槇の下葉に敷時雨ぬるとも袖の色に出めや　式子内親王

我のみしりて　わすれてはうちなげかる、夕かな我のみしりて過る月日を　公實

おもひあまり人にとはゞや水無瀬河結ばぬ水に袖はぬるやと　後鳥羽院

たゞあらましの　おもひつゝ經にける年のかひやなきたゞあらましの夕暮の空　前入道太政大臣

我身にけたぬ　ふじのねの雲にや今はまかへまし我身にけたぬ空しけふりを　家隆

きのふの雲の　おもひ出よたがかねことの末ならんきのふの雲の跡の山かせ　同

雜之部

そえのしら雲　あけばまたこゆべき山の嶺おれや空行月の末のしら雲　崇德院

月もたびねの　かり衣袖のなみだにやどる夜は月もたびねの心地こそそれ　俊成

涙にあらそな　立かへり又もきて見ん松島やをじまの笘や涙にあらそな　太上天皇

あらしもしろき

みよしの、高根のさくらちりにきや嵐もしろき春の曙

べらなり

山たかみ見つ、我こし櫻花風は心にまかそべらなり

貫之

○初の五文字に詠ぜべからざる詞

ほの〳〵と　さくらちる　大かたの　月やあらぬ　わがこひは　つく〳〵と　名もしるし

○いむへき詞　但哀傷述懷等にはよめる事もあるべしよく〳〵心を用ひて輕〳〵しくは詠べからそ

時うしなへる　今はのろら　はなちぞり　たれてめて　あとたゆる　たまぎはる　ふるき枕　ふるき衾　雲がくれ　むなしき床　すゞしき道　あしそだれ　かそみの谷　てる日のくれし　二の河　わたり河　いはしろのむそび松　うつせみの世　あたらよ　死手の嶋　よあらし　あたら國　みつせ川　さくら谷　玉なきの里　とりべ山　あだしの玉のを柳

○初五文字にたやそくそはらぬ詞　但そはらぬといふは必よむまじきにあらねども此句ばかりよく巧にて下の句かけあひかぬるものなれば初心はゝかるへきなり

いかにせん　れしなへて　おのづから　月やいかに　花よいかに　月やしる　花やしる

○よむまじき詞

數ならぬ身　貴人ならぬ人のよむまじき詞なりゆへはいはでもしれたる事なればなりそへてかやうの事を謙退卑陋とて大にきらふ事なり

君　たれもつねにはよむまゝき也同輩などにはゆめ〳〵よみかはそべからそ

我　これはよむまじきにあらねども我身我宿わがころもでの類ひなりおほく平懷にきこえやそし誰戀には君とも我ともよむは格別なり

○耳だちてよからぬ詞　但これはしかとしたる制禁にはあらねども耳にたちて俗なる詞利口めきてよからぬ詞などなり猶この外多くあるべし餘は准じてしるべし初五文字におきてよからぬは

何がは　物わびし　せまほしき　ものゆへに

三句目にれきてよからぬは

けさのはる　みねの松　としの暮　窓の梅　村そゝめ

かやうの句也てにはにて次へよみかくるがよし次の句に意きれねばゆるしてよむ事も有べし

結句のとまりにおきてよからぬは

曙の春　露の夕暮　天津ほし合　吹嵐かな　聞はまことか　風の夕暮　深山べの里

こゝちころそれ　べらなり　あらなくに

㊀字餘りの詞　字あまりのうたはこのみてはよむまじき也されども よみならはしたるはくるしからぞ

さもあればあれ　身にしあれば　折にあへば　理りあれば　鐘のおとに　有明の月に

時しあれば　あひにあいて

これらの詞つねによみ來れる事なればくるしからぞされども初心のこのみてよむまじき也

但句ごとに文字あまりて三十三四字になれは中飽病とて大にきらふ事なり

○異名の詞

なでしこを常夏といひ。猿をましら。螢となつむし菊をおきな草など。わさとよまんはよろしからぞそれも樣によるべし。床夏をとこにいひかけ。ましらを猿にかけなどせんは難なかるべし。さればとてつきなきときに緣をとり出て無理によみ入んとそるはよからぬなり。

○題詠のよみ方

むかしの人はものにふれ事に感たるこゝろをたねとしてそぐに歌とよみ出たれど。中ごろよりは。必。題を定めてよむ事をなん專とせり。されば題詠のこゝろ得は。まづ題を得たる時題の意をよく〳〵會得して。さて題といふ事をわそれたとへは看レ花といふ題ならば心をそよましてちかくは庭前に咲たる姿よりして遠く花の林の面かげにも心をうつし。朝日夕日露風などのあるべき折〳〵の風情に思ひをめぐらし。其さかひ其ときの心になりて實情より案じ出そべし。その實ある心を以てよみいづる時はおのづともの、感深し。祝にはかぎりなくひさしき心。こひにはわりなくあさからぬよしをのべ。草木生るなどをよめるにもみなそのおもむきを得てよくいひかなへる事はこの實情を先とそるにあるなり。扨この題詠にはさま〳〵の心得有。ならはしあり。そのあらましを左にしるし侍る。

●一字題

梅。柳。花。鶯。月。雪。などいふ題なり又千鳥紅葉郭公など二字に書たるもみな一字題と云り。此一字題をよむには題の心を下の句にあらはそべし上の句には緣の詞を以てよろしくつゞけてよむべし。或は第二句第三句に題の詞をよみて下の句にて緣の詞を置てよめるもあれとも。先初心のうちは大かた下の句によみいる、ときはうたのとまりよろしき也。それをいかにといふに題の文字を上の句又は初五もじなどに置てよむときは哥のそそかれて大

によからぬ事にて先達のきらひしところなり。露といふ一字題にて清輔朝臣

龍田姫かざしの玉の緒をよはみ亂にけりとみゆる白つゆ

是等のうたよりどころあるえんの詞にておもしろくつゞけしかも結句に題と置たればゆるがせしてめでたき詠格なり

結題

むそび題といふはものをよせあはして二字よりして五字六字などある題なりたとへは初春霞雪中子日など云やうの題なり題の文字をことゞく上の句にあげ又は一句のうちに云つくる事をきらふ也山家卯花といふ題にて

跡たえてくる人もなき山里に我のみ見よとみゆるうの花

かくのごとく上に山里とはき下に卯花ととめて上下の掛合をよくよむべきなりされば二字などの題にてよんどころなく上下にくばりがたきときはうの題を下の句に置て上の句にえんあることばを以てつゞけて一首をよむべきなり

窓梅といふ題にて後柏原院

にほへ猶さし入月の深き夜に花の影そふ窓の梅か香

さし入ふかき花の影ろふ皆窓の意なりかくあらは一句にまとのむめとありてもくるしからざるなり

●難題

三字四字五字などある題の實字のみにてよみかなへかたきをいふなりたとへは臨レ期遅レ約戀これはいつ頃あはんとちぎりおきて其期にのぞみて遅まじきよし返事したる也此題にて俊成卿

おもひきやしぢのはしがきかきつめて百よも同まるねせんとは

又等思兩人戀おもふ人ふたりあるをいづれも同じほどにおもふなり此題にて右大臣

いづかたも夜がれんことのわりなきにふたつに分る我身ともがな

これらの類みな難題といふなり常のうたの題をよみならひて後に難題をもよむべきなり定家卿の藤河難題百首ともいふなりよく讀誦して題のてゝろ文字の虚實などに心をつけてよむべきなり

●經文題

法華經の品々をはじめその外何の經にても一句とり出てこれを題としてよむなり。全く經文の心をとりてよめるも有。又經文の詞によりてそれを物によそへてよめるあり

序品　廣度諸衆生其數無有量　法華經

わたそべき數もかぎらぬ橋柱いかにたてけるちかひなるらん　頓阿

般若心經の中に色不異空空不異色

雲はれてみぞりにはる、空みれば色までやがてむなしかりけれ

これらは句をとりてよみたるなり　又　法華經譬喩品　其中衆生悉是吾子　俊成

みなしごと何歎けん世の中にか、るみのりの有ける物を

同壽量品　寶樹多花果衆生所遊樂

わしの山つねなる春の木のもとに人めもちらで花やみるらん　同

これらは心をとりてものによそへもして經文のまゝをたゞことうたによむなり

●詩句題

たれは白氏文集または杜律あるひは古語または唐詩の句をとりてよむなり　そのよみかた大かた經文題のよみかたに同じ唐詩の流水浸雲根といふ句の心を　頓阿

かざこしや谷にゆふゐるしら雲の中にぞ落る木曾の山川

●組題

是は五首。十首。百首又は千首などをよむをいふもつとも古人のよみおかれたる例ある組題にてよむべしみだりに心のまゝに題をくみ合てはよむへからぜ

●結題の文字虛實

これはむそび題の文字によみ入をして有へき文字ありこれを虛字といふ必よまぜしてはかなはぬ文字あり是を實字といふなりたとへば天外遊絲といふ題ならば外の字虛字なり天の字實字なり此題にて　爲平

おのづからみどりもをのが色あらぬそらにそめたる春の糸ゆふ

のこらず實字にてことゞくよみ入ねばならぬ題ありたとへば待二郭公一空明といふ題は待の字も空しくの字もみなこゝろある實字なればことゞくよみ入るべし至てよみかなへがたき時は題をまはしてよむべし題をまはす事此題にて次にあかす　西行

ほとゝぎすなかで明ぬる告がほにまたれぬ鳥の聲ぞ聞ゆる

●結題の文字まはしてよむ格

題をまはしてよむといふは題の文字を言葉に出さぜして一首のうちにそのこゝろを言まはしてよむ事也題に淺深遠近多少出入などある實字を其まゝに深し淺し多し少しといひ顯さんは無下の事なりよつてその字をまはしてよむべしもつとも一首にふかきとも淺きともの意を十分たてたるうへにて深しとも淺しともいはんは難なきなりたとへは梅遠薫といふ題にて　雅有

いづくよりさそひきぬらん我袖に梅が、うそく春風ぞ吹
いづくよりさそひうそくといふにて遠薫の意に十分かなふ也又早苗多といふ題にて　爲世

けふもまたとる手あまたにいそげとも山田の早苗猶ぞつきせぬ
とるてあまたに猶ぞつきせぬといふにて多といふ意十分也又郭公早過といふ題にて　匡房

海人のかるいらごか崎のなのりそのなのりもはてぬ時鳥哉
なのりもはてぬにて早の意をいひまはしたる也

●片題

これはむそび題などにものふたつある題をひとつはほめひとつはそしるやうの事を片題とてきらふなり尤題に出たるものをそしるべき様はなけれどたとへば月花とある題に花をしきりに賞美して月の事はさのみなきやうによみたるをいふなり

●傍題

これは題の外にことゝのを詠じくはへてよむを傍題とてきらふなりたとへは秋雨といふ題にて

雨ふれど笠とり山の鹿のねは中〳〵よその袖ぬらしけり
これ袖のぬれけるも鹿のねによりてなれば雨の題はつれて鹿の題にてよめるうたとき

えて傍題になるなり

●落題

是もまた題の哥は第一の難也たとへは山花といふ題にて花はよみたれど山のて、ろなきが落題なりされども是は初心にてもか様の事をおとす事はまれなれどもたしかによむべき題の文字をまはしてよまんとておほろげになるもまた落題なりたとへば朝霞といふ題にて

さえかへり雪げの春の朝ぐもり霞む名のみや空に立らん

是あさのこゝろはよみたれど霞の見えぬよしをよみたれば落題なり

●おもしろくよまれぬ題

題のものは賞そるがよけれとも物によりて賞せられぬが有

●余寒　殘暑　蚊遣火　五月雨などは賞そべきにあらざれらはいとはしきにつきて風情を求むべしまた更衣に衣をかふるをうしとよむは春の名殘ををしむなりよつてよみやうにてうき侘しかなしなどいふことばみな賞そる意になるなり

●餘寒

雅有

かれぬべき色とは見えぬわか草も秋より寒き春の初霜

五月雨　　道遥院

けふいくかもりこし月もわそれ草しのぶの軒の五月雨の空

これらの哥にておもふべし題に心をふかく入たれば餘情にて愛そる意こもるなり勿論の事なれとも題のものをそしる事はあしきなり尤そしるべきにはあらねども月の題に有明をよみ花の題に落花をよむ類なり

○詞書ある哥のよみかた

詞書あるうたは題の哥とはいさゝか心持かはれり題のうたは題の上にあはせてそらさぬ様によむなり　詞書のうたは其子細を詞に書て哥の心を詞書にゆづり又は哥の心を詞書にてたそくる様にそるなり新古今集に

二月まで梅の花咲侍らざりける年よみ侍ける　　中務

しるらめやかそみのそらをなかめつゝ花も句はぬ春となげゝと

これらの例にてよく〳〵そのつりあひを考しるべし又詞書の中に題あるは題詠と同じよみかたなりたとへば千載集に大宮の前太政大臣の家にて夏月如秋といへるこゝろをよみ侍ける　　敦仲

小萩原まだ花咲ぬ宮城の、鹿やこよひの月に鳴らん

○返歌のよみ方

いにしへは答歌といふ當時にても贈答といへり尤かへしするはそこしあしくともはやくよむ事を專とそべし立ながら人のよみかけなどしたるにとかく返しせんとて時をうつしたるは興さむるものなり

●詞はとらぎして心にて答たる格

古今に

あだなりと名にこそたてれさくら花年に稀なる人も待けり　　讀人不知

かへし

けふこぎはあぞは雪とぞ降なまし消ぎはありとも花と見ましや　　なりひら

これらの返歌はよみかけたることばをとらぎして心にてかへしそるなり先初心の好みてはよむまじき事也

●よみかけたる歌の詞ととりてする返歌の格

そべて返歌のよみかたは大やう先よりよみかけたる詞を取て詠ぎへし扨そのうたの詞をとりてよまば先の歌のしもの句を我歌の上の句にとりてよむべし上へとりかへがたきときは

同じ句に置まではくるしからぬ上の句を下の句へとりかへぬ樣に詠ぬへし下みな此例にてなぞらへしるべし

山里に侍ける比嵐のあしたよみて遣しける　後德大寺左大臣

夜半に吹あらしにつけておもふ哉都もかくや秋はさびしき

かへし　前中納言顯長

世の中に秋はてぬれば都にもいまはあらしの音のみぞそる

●よみかけたる歌をとりなしてよむ返歌の格

右兵衞督に侍けるとき中院右大臣中納言に侍りけるに弓をかりおきてつかさ解申てこもりて侍ける時彼弓を返しおくるとてそへて遣しける　大宮前太政大臣

やとせまで手ならしたりし梓弓かへるをみるに音ぞ鳴れける

かへし　中院右大臣

なにかそれおもひそつべき梓弓又引かへす時もありなん

●よみかけたるうたをおさへてよむ返歌の格

戀のうたなどの贈答は猶さらかけ歌をれさへてよむがならひなりかけうたをおさへてよむといふはそなたには心ふかげにのたまへどもそれはあさし我こそまさりたれと理をたてて

先のうたを言けそやうにいふなり

つゝめども袖にたまらぬ白玉は人をみぬめの涙也けり　安部清行

かへし　をの、小町

おろかなる涙ぞ袖は玉はなそ我はせきあへず瀧つせなれば

女のなき名たつよしうらみて侍ければ遣しける　隆房

おなじくはかさねてしほれぬれ衣さても干べきなき名ならねば

かへし　おんな

ながれてもそゝぎやそるとぬれ衣人はきそとも身にはならさじ

かくのごとくかへそべし但こひのうたならぬ贈答にもおさへてよむもありたとへば花の比とはぬをうらむる樣のかけ歌ならばとはぬおこたりを何とぞつみのがるゝ樣によみておさへてはよむべからぬたとへば

雪のあした後德大寺左大臣のもとに遣しける　皇太后宮太夫俊成

けふはもしきみもやとふと詠むればまだ跡もなき庭の雪哉

かへし

今ぞさく心は跡もなかりけり雪かきわけて思ひやれども　後徳大寺左大臣

かやうの心ばへなるべしされども又かけ哥におさへ所あらばおさへてよむともくるしからぬ

●よみかけたる哥の詞を其まゝ用ひてよむ返哥の格

これは鶏鵡がへしともいふかけ哥の詞をそのまゝもちひ或ひは一句或ひは二字三字をかへて口まねをするごとくにかへしをるをいふなり

そのかみや祈置けんかをがの、同じ道にも尋行かな　法性寺入道

かへし

くもりなき世のひかりにや春日野の同じ道にも尋行らん　上東門院

○即興のよみ方

即興の哥は花を見月をながめ又は山水の景氣などまのあたりに興あるをそゞによみいだすなりもつとも題を得たるか又は名所などをよむ讃合等つねの題詠のごとくなるべし題なきうたならば其趣ことば書あるべし

○挨拶のよみ方

あいさつとは人の許などにゆきて即興を詠ぜるに月花を賞してよまんにもその主または其席の時宜にそむかぬ樣に挨拶あるべしいかほどの秀哥ありとも時宜に不相應にして哥の心つきなきは詮なき事なり

○兼題のよみ方

かねてより四季景物又は戀雜祝など題を出し置て扨會席興行の日懐紙にしたゝめいづるなり

○當座のよみ方

當座とは十首あるひは二十首三十首組題を出し其席にて詠ぜるなりもつとも組題ならば挨拶のこゝろなくてもくるしからぬ但庭前の花またはその夜の月などを詠せんには挨拶の心あるべし晴なる會席には其家の家職名字等までさし合にならぬ樣に心をつくべき事也不吉の詞ふ挨拶のなき樣よくく心をつけよむべきなり

○本哥どりのよみ方

本哥をとりてよむことは第一上手のいる事なりよみおほせはたもしろきものなれども初心のうちにつねに本哥をとらんとそるときは我ちからよはくなりて趣向も出こぬ風情もふるくなりてよからぬなり自分の哥の大かた自由にはたらきよまるゝやうになりてのちは本歌

によりてよむべし近世のうたを本歌にしてよむことあれども先初心のうちは万葉集八代集よりして堀川百首までのうちにて耳遠からぬ歌を本據としてよむべしもつとも本歌をとるには奪胎換骨といふ事あり奪胎とは心をとりてよめば詞をかへてよむべし換骨とは言葉をとりて心をあたらしくよむをいへり

●本歌の詞をとりて心をかへたる格

本歌古今戀　　よみ人しらず

あかでこそおもはん中ははなれなめそをだに後のわすれがたみに

といふをとりて　　貫平

ちる花のわすれがたみのみねの雲そをだに殘せはるの山かせ

●本歌の心をとりて風情をかへたる格

本歌古今戀　　よみ人しらず

さむしろに衣かたしきこよひもや我を待らん宇治の橋姫

といふをとりて　　後京極

きり〳〵す鳴やしもよのさむしろに衣かたしき獨かもねむ

●本歌のかへしの樣によむ格

本歌後拾遺春　　能因

心あらん人にみせばやつの國のなにはわたりの春のけしきを

これをとりて　　爲家

かすみゆくなにはの春の曙に心あれなと身をたのもふ哉

●本歌の心に我作意をそへてよみたる格

本歌新古今春　　千里

てりもせぬくもりもはてぬ春のよの朧月夜にしくものぞなき

これをとりて　　定家

大ぞらは梅の匂ひにかすみつゝくもりもはてぬ春のよの月

●本歌の詞をひとつとりてよみたる格

本歌古今戀　　よみ人不知

あかでこそおもはん中ははなれなめそをだに後の忘がたみに

これをとりて　　俊成

うき身をば我だにいとふいとへたゞそをだにおなじ心と思はん

●本歌二首をとりて一首によみたる格

本歌古今雜　　よみ人しらず

いくよしもあらぢ我身をなぞもかくあまのかるもに思ひ亂るゝ

同　古今戀　　れなじく

よひ〳〵に枕定めんかたもなしいかにねし夜か夢に見えけん

此二首をとりて　　定家

はてはたゝあまのかるものやどりにて枕さだめんよひ〳〵ぞなき

●本歌の趣向によりてよむ格

本歌万葉集一　　邦有親王

たとやめの袖ふきかへす飛鳥風都を遠みいたづらに吹

此うたをとりて

あすか風さと吹かへてたをやめの袖にもけさや秋をしるらん

以上の本歌とり樣によりて工夫とめぐらしよみかたとしるべし尤本歌どりはいかに案じても趣向の得がたき事ありさやうの時は古歌をおもひよりて本歌どりにてよむがよろしき也さればとてつねに古歌にそがりてよめは口つきふるくなりてわろきなり

○名所の歌よみかた

名所の歌をよむにはあまり耳遠き名所をばこのみてよむべからぢさて題詠にては名所のゆるがぬ樣によむべしたとへば住吉の浦ならば御稜　宮居　松　忘草　見とつぐし　御幸　遠里小野　淡路島　などよみ合それば住よしのうらがうぢかぬ也又よみ合なきときは住吉にて名高き古歌の詞をよみ入てよむべし名高き古歌の詞とは「松を秋風ふくからに」「岸による浪よるさへやのたぐひなり住よしの浦をよみたるうたの明石と置てもしき津とをきても同じきをゆるぐとてきらふ事なり住吉浦を題して　　道遥院

住よしのまつつまあれやゆふちどり淡路のなみに立かへり鳴

●名所の景物に月雪などいづかたにもあるべけれどもおなじくはよみなれたるところしかるべし月にはそまあかし雪にはふしみふかくさ雲にはかづらき山いこま山などをよむへきなり浦月といふ題にて　　後柏原院

あかしがた入江の月の影にだにのこる隈なきよものうらなみ

●むかしよりよみならはしたる故事ある名所ありたとへばながらの橋は跡たゆるよしをよみ水無瀬川にはみづありともみづなきよしをよみ住吉の濱にはしらなみのかへるよしをよめるごとく今はそこしのたがひあれどもたゝいにしへによりてよむべきなり長柄の橋を題して　　道遥院

身のうへにかけてもしのぶ橋柱くちしながらの名は殘るとも

●其ところ其地にのぞみては尋常のよみ來れる格をはづして時の景氣にしがひてよむ事ありたとへば普光院殿富士御覽じに東へ趣かせ給ひし時國主より御もてなしのためとてわたらしき關屋をきら〳〵しくつくりたてたりしかば都にておぼし召たるとはかはりてみけしきあしかりけりされども其夜の御會に

ふきかへて月こそもらね板庇とく住あらせ不破の關もり

このうた出來て御けしきなほりけるとぞ

●旅の名所をよむには大かた海道そぢのつねによみなれたるをよむべし

はるかなる三上のだけをめにかけて幾瀬にわたるやすの川なみ　後京極

●名所ならぬところにのぞみて其所をよむ事大かた物の名にてよむべし古今物名にかみやかはをよみ入たるなどしかとしたる例とそべし日ぐらしの瀧にて　玄旨

きのふけふ秋くるからにひぐらしの聲うちそふる瀧のしらなみ

●名所のよみ合ふるくよみかれたるにてよむべきなりされども名所相應したれば時によりてあたらしくよむ事も有衣笠中納言の

しらつゆの手枕のの、女郎花たれにかはせるけさの名殘ぞ

とよみ給し此手枕野大和の名所にてをみなへしの証歌なしといへとも一首のとり合よろしきゆへときの秀逸なりしと也

○戀の題よみかた

戀の歌尤ふかくおもひ入てよむべきなり寄戀はそのものによせて趣向を逢戀とか別戀とか何の戀になりとも思ひさだめてよむべし　よせものゝ縁にひかれて全躰の趣向のたゝぬ樣にならぬ樣にそべきなり　寄物によろへてよめる事もあり又よせものがそぐに戀の用をなす事も有

寄レ雲戀　慈圓

こひしぬる夜半の煙の雲とならば君が宿にやわきてしられん

寄レ簾戀　耕雲

これよせたる雲をそぐに用につかふなり

玉だれのひまもとめてもかひぞなきかけはなれたる人の心に

是は詞をかりてよそへたるなり其餘は準じて知べきなり

○てには大概

夫てには漢文の焉哉乎也の助字の如くにてうたの上下の勢によりてその心樣々たがふこ

とあるべしおほく古哥とそらんじて後にその例をあきらめしるべし

てにをは多き歌は長高きやうに聞ゆる物ゆへ初心のうち強てにをは多くよみいる、時は一首のび過てよはくきこゆ又は趣向の本意にたがふ樣の事もあるものなりよく〳〵古歌をみならふべし

てにをは少き歌はたけみじかく一首かぞ〳〵しくてよからぬなり万葉集などに例ありとてがに　もよ　ちふ　かもなど遠きてにはを遣ふべからぬ一首のたけみ玄かくなるもの也

哉

歎息の哉　歎息とはさて〳〵となげきたるこゝろ也此歎息のかなは至ておもき心にてとまるなり

闕　風をいたみ岩うつなみのおのれのみくだけて物をおもふ比哉　源重之

古　ほと、ぎす鳴やさつきのあやめ草あやめもしらぬ戀もする哉　よみ人不知

これらの哉さて〳〵となげきたるなりさて〳〵かやう〳〵に物おもはしき此頃なるかなさて〳〵あやめもしらぬこひもする事かなと歎息したる心なり

心かろき哉　一に吹ながしの哉といへり一首さら〳〵と云ながして心の殘らぬ也此留りは輕き心なり

古　おと羽山音に聞つゝあふ坂の關のこなたに年をふる哉　在原元方

新古　さゝら咲遠山鳥のしだり尾の長〳〵し日もあかぬ色哉　太上天皇

心の上にかへる哉

後拾　君がためをしからざりし命さへ長くもがなと思ひける哉　義孝

是は逢見るまでは命もをしからぬおもひしかども一度あひみればいまさらにいのちのをしく成たるをかくはおもふまじき事なれどもといふ心にかへるなり

中の哉　是は哥のとまりにあらぬ中の句によみ入たるを下へうくるこゝろのてにはなり

玉葉　かしてまるしでに涙のかゝる哉又いつかはとれもふ命に　西行

拾イ　てぬ哉としばしは人におもはせんあはでかへりし夜のねたさに　よみ人不知

かに通ふ哉　かとばかりいふに同じ心なるなり一首のよみ樣によりて疑の心をふくめるもあり

拾愚　さだめなきしぐれの雲のかゝる哉さてや紅葉の薄くこからん　定家

後　もつともに折とはなしに打とけて見ねにける哉朝貞の花　よみ人不知

當意の哉　現在の哉ともいへりそのまゝをいへるなりたとへば　見るかな　ふるかな　比

かなどのたぐひなり

新拾 うき人の面かげそへてたのむには來ぬ夜もひとり月をみる哉　邦省
チ 久かたの月ゆへにやはこひそめしながむればまづぬる、補かな　寂超
そでに往たる哉　過去の哉ともいへり　聞し哉　にし哉の類なり
金 秋ならで妻とふ鹿を聞しかなおからの聲の身にはしむかと　行家
後拾 やそらはでねなましものをさよふけてかたぶくまでの月をみし哉　赤染右衛門
願ふ哉　て、ろに冀ふ意あるなり　もがな　てしがな　にし哉のたくひなり
後 名にしおはゞ逢坂山のさねかづら人にしられでくるよしもかな　三條右大臣
新古 秋の夜の有明の月のいるまでにやそらひかねて歸にしかな　敦達
古 み、なしの山のくちなし得てしがな思ひの色の下染にせん　よみ人不知
哉留りはさしてか、へ字のさだまりたるさたなし唯上よりの心をうけて詞のきれたるところに懼べし右にあぐる所の例によりて考しるべし

●らん

らんは疑のてにはなりゆへにらんと留るには上に必疑のことばあるべし　疑の詞といふはいつ いづれ いづら 誰 なに なぞ など さぞ いかに いかで いくや かかもかはさぞ などのたぐひの詞にておさへるなり

古 くるとあくとめがれぬものを梅の花いつの人までにうつろひぬらん　つらゆき
同 雪とのみふるだにあるをさくら花いかに散とか風の吹らん　みつね
古 人のみる事やわびしき女郎花秋霧にのみ立かくるらん　忠岑
同 大空はこひしき人のかたみかはものの思ふごとにながめらるらん　ひとさね
今どのみたのむなれども白雲の絶間はいつかあらんとそらん　よみ人不知
又うたがひの詞てにはあらざれども上の句にうたがひの意を含みてよみたればくるしからぬ
古 久かたのひかりのどけきはるの日にしづ心なく花のちるらん　紀友則
同 はるの色のいたりいたらぬ里はあらじさける咲ざる花の散らん　よみ人不知
是はかはどのどかなる春の日にいかでかは靜なる心もなくて花のちる事ぞやとうたがふなり又春の色のいたりいたらぬ里もあらぬに何として咲おくれたる花のみゆる事ぞとうたがふところとふくめり
又うたがひの心もあく又うたがひのてにはことばも用ひたゞ上よりそらくと詠くだしてらんと留るうた有此類いにしへは多くよみたれども近世はこのまぬ事なり、
古 我やどにさける藤浪立かへり過がてにのみ人のみるらん　みつね

同　秋はぎにうらびれをれは足引の山下ぞよみ鹿の鳴らん　よみ人不知

上よりおさへつめてらんと留るあり

續古　おもはぬをおもふといはゞ大野なる三かさの杜の神ぞ知らん　大伴百代

千　道遠みいるの、はらのつぼ菫春のかたみにつみてかへらん　顯國

新古　久かたのあめにしほる、君ゆへに月日もしらで戀わたるらん　八丸

らんを重ねてよめるあり

後拾　わすれなんそれもうらみぞ思ふらんこふらんとだに思ひれこせよ　西宮左大臣

これらのよみたる例多しといへども初心は先うたがひの心にてよみ疑のことばを上に置べし

●や

やはうたかひのてにはなりかよりはゆるやかなる心なりもつとも一首のよみやうによりてそこし意かはれり

古　うぐひすの笠にぬふてふ梅の花折てかざゝん老かくるやと　東三條左大臣

同　あかぬやとこゝろみがてらあひみねばたはふれにくき迄ぞ戀しき　よみ人不知

新古　涼しさは秋やかへりてはつせ川ふる河のべの杉の下かげ　有家

うたがひ心のやをかさねてよめるあり

古　春やとき花や遲きと聞わかむ鶯だにも鳴ぞも有かな　言直

同　よやくらき道やまどへる郭公我宿をしも過がてになく　友則

いせ　君やこし我や行けんおもはぬぞ夢か現かねてか覺てか

新古　夜や寒き衣やうすきかたそきの行あひのまより霜や置らん　よみ人不知

やと留て心の上にかへるあり

古　妻こふる鹿ぞ鳴なる女郎花おのがそむの、花としらぬや　みつね

同　ふくかぜと谷の水とをしなかりせば深山がくれの花を見ましや　つらゆき

物ふたつならべてよむときに用ゆるや　口合のやともいへりこれは　さらしなやおばすて山　かづらきや高間の山　大はらやをしほの山これらふたつとり合せていふによりてやときる、なり又月や花　はなやもみぢなどいへるも同じ

玉葉　春の雨秋のしぐれと世にふるは花や紅葉の爲にぞありける　光俊

いせ　大はらや小盤の山もけふこそは神代の事もれもひ出らめ

ねがふ心のや　是はばやはやおとのたぐひなり

千　見せばやなとしまの海士の袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらず　大補

新古 八しれぢ今や〳〵とちはやふる神さぶるまて君をこそまて　よみ人不知

古 天の川もみぢの橋をわたせばや七夕づめの秋としも待

一首をやすめたるや

古 谷風にとくる氷のひまごとに打出る涙や春のはつ花　當綱

續拾 いたづらにたつやけふりのはてもなしあふを限ともゆる思ひは　親長

推はかる心のや　推量のやといふ　我なれや　あれや　人なれやなどのたぐひなり

千 おぼつかなうるまの島の人なれや我ことのはをしらぬ顔なる　公任

新古 もゝしきの大宮人はいとまあれやさくらかざしてけふもくらしつ　赤人

この人なれやは人なるかといふこゝろなりいとまあれやは暇あるかといへるなり

古 谷河のうへは氷れる我なれや下にながれて戀わたるらん　おほより

きやとゝむるや　きやとうたのとまりにおくどきは上に必うたがひの詞を置べし

詞 關こゆる人にとはゞやみちのくのあだちのまゆみ紅葉しにきや　堀川右大臣

是はもみぢしにけりやいかゞとうたがひの心をあましてよめり上におくきやきやと上にを

くには必下にともじ又はとはのてにはにてか、へてよむべし

千 うき人をしのぶへしとはおもひきや我心さへなどかはるらん　ほり川

新古 年たけて又こゆべしとおもひきや命なりけりさよの中山　西行

後 をちこちの人めまれなる山里に家居せんとはれもひきや君　よみ人不知

古 わすれては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみ分て君をみんとは　なりひら

めや　是はめやはの心なり上にかへりて治定そる心あり

いせ 移しうへは秋なき時やさかざらん花こそちらめ根さへ枯めや

花こそは散らめ根はかれめや根はかれまじとかへりて治定そるなり　又めやはの意にあら

ぢして只やの字の心にて上にかへるうたもあり

後撰 おもひ川たゆまながるゝ水の泡のうたかた人にあはで消めや　いせ

古 むら鳥の立にし我名今さらにてをなしふともしるしあらめや　よみ人不知

これはあはで消めやきゆるであらふぢると上にかへりて治定そるなりしるしあらめやしる

しあらじと治定そる也又哥の上におきたるめや有是もおしかへしてみるこゝろなり

古 わか戀を人しるらめやしきたへの枕のみこそしらばしるらめ　よみ人不知

新古 しるらめや木の葉ふかしく谷水の岩まにもらぬ下の心を　前太政大臣

やは　是もめやにれなじくかへるてにはなり

古 さくら花はるくはれる年だにも人の心にあかれやはせぬ　伊せ

後 つねよりものどけかるべき春なれば光に人のあはざらめやは　左大臣

此櫻花のうたは人のこゝろにあかれぬかはあかれよとかへりて下知したるなり又光に人のあはざらめやはひかりにあふべきぞとなり又やはとよみて只やの心になる歌あり

新古 たへてやはおもひありともいかゞせん葎の宿の秋の夕ぐれ　雅經

此たへてやはのやはは堪てやとばかりいふにおなしき也やとばかりにてやはときかすやあり

古 秋の田のほのうへをてらす稲妻のひかりのまにも我や忘るゝ　よみ人不知

拾愚 ゆめかさは野べの千種の面かげはほのゝぐなびくなびく薄ばかりや　定家

これら光のまにも我やはわするゝほのゝぐなびくをゝきばかりやはの心也をべて結句にやを置くこと初學の人のたやすくはをまじき事なり

とや　とてやといふ心なり上にかへる心ありとまりに置くは重きてにはになる也

古 はるがすみたなびく山のさくら花うつろはんとや色かはりゆく　よみ人不知

新古 難波がたみじかき芦のふしのまもあはて此世を過してよとや　伊勢

ましや　是はおしかへしてみる心ある也

いせ けふこそはあすは雪とぞ消なまし消ぬはありとも花とみましや

れや　治定してそれとさしたるてにはなり

古 里はあれて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋ののらなる　源昭

源 しほたるゝ海士のころものごとあれやうきたる涙にぬるゝ我袖

古 世の中はうきものなれや人言のとにもかくにもきこえぐるしき　つらゆき

新古 津の國のなにはの春は夢なれや芦の枯葉に風わたる也　西行

雜のや　是はそがはらやふしみ　敷島や大和　おしてるやなには　近江のやかゞみの山　そまのうらや　みよしのや　やの字別に心なしよつてよび出やともいへり古歌にあまた見たれば証歌を擧ぶ

●ぞ

ぞはつよくおしていふてにはなり治定したる心有うくそつぬふひゆるうの假名にてかゝへてよむべしかゝへるとは此もじを上におきてよむなり

いせ 名のみ立しでのたをさはけさぞ鳴庵あまたにうとまれぬれば　小町

古 おろかなる泪ぞ袖に玉はなる我はせきあへぬ瀧津瀬なれば　寵

同 しのゝめの別ををしみ我ぞまづ鳥より先に鳴はじめつる

續拾 おもふ事せめてむなしきはては又心なるべき世をぞそむかぬ　かね氏

源 夕まぐれほのかに花の色をみてけさは霞の立ぞわづらふ　素性
古 秋かせの身にさむければつれもなき人をぞ頼くる、夜毎に　院御製
続千 夏引の手引の糸の打はへてくるしき戀のよるぞ増れる　ていか
玉 玉しひも我身もそはぬ歎して涙久しき世にぞふりにし
後 いはでおもふ事もありその濱かせに立しら浪のよるぞ佗しき　よみ人不知
古 水の面にうかべる舟の君ならば爰ぞとまりといはましものを　いせ
ぞと云はなしておさへなきあり
いせ 大かたは月をもめでしこれぞ此つもれば人の老となるもの　なりひら
続後 今こんといはぬばかりぞ郭公有明の月のむら雨のそら　順德御製
まれには加様によみながしたるも侍れども初心は必先に云へるれさへ字にてかゝへてよむ
べし若右のおさへ字よみいれがたきときはときやなどの字にてかへてよむべし此二首のご
とくつゞけがらよろしく詞なだらかなるは格外の事也
ぞとやとかよはしてよむ事あり
古 かそがのに若なつみつゝよろづ代をいはふ心は神ぞしるらん　そせい
此ぞもじやをつめて神ぞといへるなり

むさしののかそみもしらぬふる雪にまだ若草の妻やくもれる　定家
此やもじはぞと置べきところをのべてよめるなり
疑のぞ　是はぞや　しぞ　頃ぞ　ばかりぞ　のたぐひなり或は上にうたがひの詞を置てぞと
とむるてにはも有
新古 筏こよまてこと問ん水上はいかばかり吹みねのあらしぞ　資宗
拾イ 山里のかさねにさけるうのはなは誰白妙の衣かけしぞ　よみ人不知
續千 いぞゝ猶あひみてのちもかゝれとはたがならはしの袖の涙ぞ　親房
又上に問かくる心をよみてぞとめたるてには有
拾イ いでわれを人なとがめそ大舟のゆたのたゆたに物おもふ頃ぞ　大歌所
同 わがこひは行衛もしらぬはてもなしあふを限とおもふ斗ぞ　みつね
又下知したるそ有これはそみてよむべし
拾イ 奥山にたぎりて落るたきつせの玉ちるばかり物な思ひそ
同 しらつゆのおくつまにそるをみなへしあなわづらはし人なてふれそ　よみ人不知
てそ　これは唯ぞとはかりいふに大方同じ上に云けせてねへめられえのかなにておさへて
よむべしあるひは上に哉とをきてとまりたるもあり

古 おなじえをわきてこの葉のうつろふは西こそ秋の始なりけん　かちおん
拾イ 八重むぐら茂れる宿のさびしさに人こそ見ねね秋は來にけり　惠慶
古 駒なべていざみにゆかんふる郷は雪とのみこそ花の散らめ　つらゆき
千 ながからん心もしらぬ黒髪のみだれてけさは物をこそ思へ　堀川
續古 しほたるゝいせをの海士の袖だにもぬれぬる隙は有とこそ聞　親隆
古 花ぬゝきわれこそ下におもひしかぬに出て人に結ばれにけり　なりひら
續千 ほと、ぎす一聲とこそ思ひしに待えてかはる我心かな　宣時
拾イ 足引の山よりいづる月まつと人にいひて君をこそまて　人丸

云のこそてにはのころあり

古 つのくにのなにはおもはぬ山城のとはに逢みん事をのみこそ　よみ人不知。

又こそと置てらんと留るてにはあり

新古 足引の山のさくら戸を稀に明て花ころあるじたれを待らん

ねがふ心のそ　是はそは　そも　そや　もぞ一首の勢にてうたがふ心にもあやぶむ心にも

なるなり

古 いのちやは何ぞは露のあだものをあふにしかへは惜からなくに　友則

同 色よりも香こそあはれとおもはゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも　よみ人不知
後 ふりぬとておもひもすてじから衣よそへてあやな恨もぞする　雅正
堀 いさりせしあまの敷しいづくぞや嶋めぐるとて有と云しは　相如

重ねておくぞもし

古 北へゆく厂ぞ鳴なるつれてこし數はたらでぞ歸べらなる　よみ人不知
古 物もいはでながめてぞふる山吹の花に心はうつろひぬらん　元輔
堀 秋風になびく尾花のゆふまぐれたが袖ぞとぞあらまたれぬる　顯仲

●ぬ

ぬも岩にはれはんぬふのぬとて二樣あり　れはんぬと云はぬるの心にかなふなり既に過さ

りたるて、ろあり

古 梓弓おしてはるさめけふふりぬあそさへふらば若なつみてん　よみ人不知
同 ちりぬとも香をだに殘せ梅の花こひしき時の思ひでにせん　同
同 としふればよはひは老ぬしかはあれど花をしみれば物おもひもなし　前太政大臣
後 今さらにおもひ出じとしのぶをてひしきにこそ忘れわびぬれ　左大臣

ふのぬといふはぬの心にかなふなり　月やあらぬ　にはぬ　しらぬ　こぬなどのたぐひな

り皆不の字に同し

古 遠近のたつ木もしらぬ山中に覺束なくもよぶこ鳥かな　よみ人不知

同 春たてど花も匂はぬ山里は物うかるねに鶯ぞなく　棟梁

一首のうちにおなじぬふたつはよむまじきよしうた合には難せられたりふのぬ畢ぬふたつにてよむはくるしからぬとなり

古 はるきぬと人はいへどもうぐひすのなかぬ限はあらじとぞおもふ　忠岑

ぬるはつるに同じ尤畢ぬなるべし

後 松もひさわかなもつまぬ成ぬるといつしかさくらはやも咲なん　左大臣

右二首の心をよく〳〵辨へてよむべし

●か

かはうたかふ心あり又問ふ心ありまたかとはかり云て哉の心と同じきもあり疑ひのかもじはやらん　誰　何　いかでなどのてにはにてうけてよむべし

いせ しら玉か何ぞと人のとひしとき露とこたへてけなましものを

二字うたがひのかとて有

古 秋かぜの吹上にたてるしら菊は花かあらぬか涙のよそるか　藤原朝臣

疑の心のかと多くかさねてよむ事あり

いせ 君やこし我や行けんたもほゝすず夢か現かねてか覺てか

同 はる〻よの星か河邊の螢かも我住かたの海士のたく火か

哉にかよふか　是は歎息の心あるべし

古 あま雲のよそにも人のなりゆくかさそがに目にはみゆる物から　有常女

同 吹まよふ野かせをさむみ秋萩のうつりもゆくか人の心の　雲林ゐんみこ

新古 夕づくひさそやいほりの柴の戸にさびしくも有か蜩のこゑ　忠良

吹ながしの哉にかよふか　是は問かくる心あるべし

古 淺みどり糸よりかけてしらつゆを玉にもぬける春の柳か　遍昭

拾イてひそてふ我名はまだき立にけり人しれぬ社思ひそめしか　忠見

願ふ意の哉にかよふか　是はにもかてしかみしかの類也

古 心がへするものにもか片戀はくるしきものと人にしらせん　よみ人不知

同 おもふぞちはるの山べに打むれてそこともいはぬ旅ねしてしか　おなじく

同 甲斐がねをさやにもみしがけ〻れなくよこをりふせるさやの中山　大歌所

句の中にありて疑問のこ〻ろのあるか　是はなはたかるきこ〻ろにてつかふてにはなり

新古 あけぼのや河せの涙のたかせふねくだすか。人の神の秋霧　通光

同 うつりゆく雪にあらしの聲となり散かか柾木のかづらきの山　雅經

かは　只かの字はかりの心にてよみたる有またこゝろの上にかへるてには有

古 けふのみと春を思はぬ時だにも立こと安き花のかげかは　みつね

立こと安き花の陰かはやすからぬとかへるなり

古 大そらはこひしき人のかたみかは物おもふことにながめらるらん　ひさつね

●し

しもじに過去現在休めたる字の差別あり　過去とはそでにそぎゆきたる心のし文字を云

見ゐし　ありし　ゆきしなどのし文字なり尤一首のこゝろによりてそこしのたがひあり

新古 春といへば霞にけりなきゆふまで涙まに見ゐし淡路島山　俊惠

同 岩間とぢし氷もけさは解そめて苔の下水道求むなり　西行

現在のし文字とは當時さしあたりていふてにはなりむかふしともいへり　にし　へし　ら

しなど也

新勅 天の河うきつの涙彦星の妻むかへ舟今や漕らし。　敦仲

新古 今さらに雪ふらめやもかげろふのもゆる春日と成にしものを　よみ人不知

古 しらくもにはね打かはし飛ケ厂の數さへみゆる秋の夜の月　同

詞のやそめにおきたるしもじ有

古 ふるさとはよしの、山し近ければ一日もみ雪ふらぬ日はなし　よみ人不知

同 ちる花のなくにしとまるものならば我篤にをとらまさやは　治子朝臣

し文字を二つ重ねてをく事あり

新古 聞てしも猶ぞねられぬ郭公待しよごろの心ならひに　花園左大臣

同 つらかりし多くの年はわをられて一よのゆめを哀とぞみし。　範永

らし　らしはらんといふと大方おなじ心なりもつともらんは十分のうたがひ也らしは七八

分のうたがひにてかるさうたなり

古 さくら花咲にけらしも足引の山のかひよりみゆる白雲　つらゆき

新古 はる過て夏木にけらし白妙の衣干てふ天のかく山　持統御製

古 龍田川もみちばなかる神なひの三室の山に時雨ふるらし。　よみ人不知

べし　なるべしなど、推はかる心もあり又かくあるべしと治定したる意もあり又べみとい

ふもべしに同じ

古 おく山のいはがき紅葉ちりぬべし。してる日の光みる時なくて　關雄

同 「さほ山のは、その紅葉ちりぬべみよるさへみよとてらせる月影」　よみ人不知

べしにかよへるまし有

新古 「おもひかね打ぬるよひも有なまし吹だにそさめ庭の松風」　太政大臣

古 「見る人もなき山里のさくら花外のちりなん後ぞ咲まし」　伊勢

かし　是は治定して下知をる心あるべしまよりは強きうたのてにはなり

後拾 「いはぬまはまだしらじかし限なくわが思ふべき人は我とも」　兼房

大和 「さても君わをれけりかゑうくひすの鳴をりのみや思出べき」

●さへ

さへは副の字をよませり大躰だにといふにおなじ

草 「山ざくら散なん後の家路さへ花に忘れてしをりだにせゑ」　順阿

さへをでにはにたしてよみたる有

新古 「影さへに今はと菊のうつろふは波の底にも霜やおくらん」　是則

●も

もは物をかねるてにはも也　紅葉も　花も　月も　日も　彼も　是もなどいへるなり又我もとば

かりよみて人もの心をかねるもの字あり畢竟こゝをいひてかしこをかねるこゝろ也

新古 「袖のつゆもあらぬ色にぞ消かへるうつればかはる歎せしまに」　太上天皇

疑ひの心のも有　かも　やもの類なり

古 「はるがすみ色のちくさに見わつるはたなびく山の花の影かも」　興風

同 「たねしあれば岩にも松は生にけり戀をしてひはあはさらめやも」　よみ人不知

●の

のは種々の心あり至てゆるやかなる字なれば一首のうちに多くありても耳にたゝぎはくる

しかるまじきにやされどものもじ多くある歌はことばのびそぐるものなり歌合にはのもじ

四つあるを難せられたる事ありされども一首の躰によるべきか

新古 「冬枯のもりれ木のまの霜の上に落たる月の影のさやけき」　滑輔

此歌にのもじ七つあれども耳にたゝぎ

にもじを置べきところにのもじをおきたるあり

金 「あふとみて現のかひはなけれども夢はかなき夢ぞ命也ける」　顯輔

後拾 「あさぢふの秋のゆふぐれ鳴むしは我ごとしたに物やかなしき」　かねもり

ぞもじを置べきところにのもじをかへて置るあり

古 「ひとりして物とおもへば秋の田の稲葉のうよといふ人のなき」　みつね

後 東路のさの、ふなはしかけてのみ思ひわたると知人のなき　等

のもじにてとめたるあり

古 吹まよふ野かせをさむみ秋はぎのうつりもゆくか人の心の　雲林いんみこ

むかしれもふねざめの空に過にけん行ゑもしらぬ月の光の　ていか

の文字にてとめる事古歌にも多く見ゆ功者の上の業なるべし初心のうちにはこのみて

よむべからぬそべてのもじは歌の躰のびそぐるものゆへかりそめにおくときはうたのよ

はくなるものなり

●と

ともじは唯ことばにつきておさゆるてにはなれどもいたつてかるき心なり　月みんと　け

ふのみと　みれと　行なんとなどの類なり大かたはにの心にかよへり

古 ちらねどもかねてぞをしき紅葉は今は限の色とみつれば　よみ人不知

新古 たのめぬは人をまつちの山なりとねなましものをいざよひの月　太上天皇

物とかぞへるともしあり　君と我　はると秋との類なり

いせ 行水とそぐるよはひとちる花といづれ待てふ事を聞なん

後拾 いかにねてあくるあしたにいふ事ぞきのふをこぞとけふをことしと　小大君

●て

ては上をうけて下にかけるてにはなり　これは句の中にある時の事なり　輕きこゝろにい

へり

拾 あふ阪の關の清水にかげみえて今やひくらん望月の駒　つらゆき

結句の末におくときは上の句へかへるなり是はおもき心也

古 此里にたびねしぬべしさくら花ちりのまがひに家路忘れて　よみ人不知

堀 あたらしき年や我身をとめくらんひまゆく駒に道を任せて　隆季

して　してとめるも上の句へかへる心あるべし

新古 よしさらば散までは見じ山ざくら花のさかりを面影にして　爲家

いせ 月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつは元の身にして

てし　てん　てぬ　てへ

古 よしの河岩浪たかく行水のはやくも人を思ひそめてし　つらゆき

同 わかれをば山のさくらにまかせてんとめんとめじは花のまに〳〵　幽仙法師

後 かくながらちらで世をやはつくしてぬ花のときはもありとみるべく　よみ人不知

古 今さらにとふべき人もおもほえぬ八重葎さして門させりてへ　おなしく

●に

こゝにかしこにとある事にかくある事になどなり大方のもじとも云などの例にてしるべし

古 花の色はうつりにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに。 小町

拾イ 八重葎しげれる宿のさびしきに人こそ見えね秋は來にけり 惠慶

だに これはくらべものを出してそれだにもかくあるにこれはさもなしと云又それこそさもあらめせめてこれだにかくあれかしといふ心にも用ゆ

古 みせばやなをじまの海人の袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらぬ 大輔

新古 ちりをだにそゑじとぞおもふ咲しより妹と我ぬる常夏の花 みつね

●を

とはものをことはるてにはなり句の中にあるも輕からぬ

古 花の香を風のたよりにたぐへてぞ驚さろふしるべにはやる 友則

新古 秋の葉にふけは嵐の秋なるを待けるよはのさをしかの聲 太政大臣

これら 花の香を 秋なるを と物をつよくことはる心也

かへしのを 是は上に心のかへるてにはなり

新古 鳴鹿の聲に目さめてしのぶ哉みはてぬ夢の秋の思ひを。 慈圓

後撰 行かへる八十氏人の玉かづらかけてぞたのむあふひてふ名を。 よみ人不知

これらの二首よく〳〵考べし 秋のおもひをしのぶかなあふひてふ名をたのむかなと上の句にかへるてには也

いひのこそを 是はをと留てこゝろをのこそなり

新古 ものおもはてたゝ大かたの露にだにぬるればぬるゝ秋の袂を。 有家

古大歌所 をぐろさきみつの小島の人ならば都のつとにいざといはましを。

●は

はは物をつよくことはる心あり をとなどよりつよきかたなり

拾 山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば 宗于

拾 もみぢせぬときはの山に住鹿はおのれ鳴てや秋をしるらん 能宣

はのもじにて三處にことはりたる有

古 秋は來ぬもみぢは宿にちりしきぬ道ふみ分てとふ人はなし よみ人不知

心を上の句へかへるはもじ有

同 おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへぬ瀧つせなれば。 小まち

●に

こゝにかしこにとある事にかくある事になどなり大方のもじとも云などの例にてしるべし

古 花の色はうつりにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに。 小町

拾イ 八重葎しげれる宿のさびしきに人こそ見ねね秋は來にけり 惠慶

だに これはくらべものを出してそれだにもかくあるにこれはさもなしと云又それこそさもあらめせめてこれだにかくあれかしといふ心にも用ゆ

古 みせばやなをじまの海人の袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらぬ 大輔

新古 ちりをだにそゝじとぞおもふ咲しより妹と我ぬる常夏の花 みつね

●を

とはものをことはるてにはなり句の中にあるも輕からぬ

古 花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる 友則

新古 萩の葉にふけは嵐の秋なるを待けるよはのさをしかの聲 太政大臣

これら 花の香を 秋なるを と物をつよくことはる心也

かへしのを 是は上に心のかへるてにはなり

新古 鳴鹿の聲に目さめてしのぶ哉みはてぬ夢の秋の思ひを。 慈圓

後撰 行かへる八十氏人の玉かづらかけてぞたのむあふひてふ名を。 よみ人不知

これらの二首よく〳〵考べし 秋のおもひをしのぶかなあふひてふ名をたのむかなと上の句にかへるてには也

いひのこそを 是はをと留てこゝろをのこそなり

新古 ものおもはてたゝ大かたの露にだにぬるればぬる、秋の袂を。 有家

古大歌所 をぐろさきみつの小島の人ならば都のつとにいざといはましを。

●は

はは物をつよくことはる心あり をとなどよりつよきかたなり

拾 山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば 宗于

拾 もみぢせぬときはの山に住鹿はおのれ鳴てや秋をしるらん 能宣

はのもじにて三處にことはりたる有

古 秋は來ぬもみぢは宿にちりしきぬ道ふみ分てとふ人はなし よみ人不知

心を上の句へかへそはもじ有

同 おろかなる涙ぞ袖に玉はなをわは世きあへぬ瀧つせなれば。 小まち

言そて、風情をのこそはもじ有

古 吹かせになきてうらみよ鶯は我やは花に手だにふれたる　よみ人不知

續後 をぐら山しぐる、比の朝なゝきのふはうすきよものもみちば　ていか

右の二首のはもじ句の中にあれどもしかも心かるからをして意味ふかし初心のむさとよむましき躰なり

●けり

けりはむそぶてにはにて尤つよき辭也　ける　けれ　けん　きなどみな心おなじ一首のいきほひによりて輕重あり

古 世の中はかくこそ有けれ吹かせの目にみぬ人もこひしかりけり　つらゆき

自讃 影やどす露のよそがに秋くれて月ぞすみけるとの、篠はら

古 よひ〳〵に枕さだめんかたもなしいかにねしよか夢にみねけん　よみ人不知

後 たらちねはか、れとてしもぬばたまの我黒髪をなでそや有けん　遍昭

古 うたゝねにこひしき人をみてしより夢てふものは頼そめてき　小まち

●なり　也けり

なりはむそぶてにはなり尤治定ゝたる詞なり也　けりは事を云つめて各別につよくき

る、てにはなり

新勅 まだちらぬさくら也けりみよしの、よしの、山の峰のしら雲　としつな

後撰 惜からでかなしきものは身也けりうき世そむかん方をしらねば　つらゆき

●なん

是はふたつのつかひ樣ありひとつには也のて、ろにおなじ又ひとつには下知したるて、ろのなんあり

いせ さくら花ちらば散なんちらぬとて故郷人のきてもみおくに

右は散なりと言そてる意にてなりと同じ　悲見

新古 やかぎとも草はもえなんかそがのを只はるのひに任たらなん

此うたの結句にあるなんは只春の日にまかせたれなと下知したる心なり

●めり　める　めれ

めりはむすぶてにはにすこしうたがふ意をかねたり又めるめれはめりよりはそこしかるきかたなり

古 立田河もみぢみだれてながるめりわたらば錦中や絶なん　よみ人不知

拾イ あそからは若菜つまんと片岡のあしたの原はけふぞ焼める　人丸

●たり

是もむそぶてにはなり尤現在の事にいへり

詞 古歌は春めきにけりみよしの、みかきがはらに霞こめたり　かねもり

●せり　せる　せん

是も大かたたりにおなじもつとも現在未來のたがひあるなり

古 このとのはむべもとみけりさき草のみつばよつばに殿作せり

同 わだつうみの濱のまさごをかぞへつ、君かちとせの有數にせん　よみ人不知

●つ、

つ、はつのもじをかさねてつよくいへるてにはなりたとへば　おもひつ、　ながめつ、はおもひつ〳〵ながめつ〳〵とくりかへしていふ心なり又つ、を留りにおく事餘情ふかきものなれども上手のうへにあらざれば一首具足せぬしてのびてきこゆるものなり

古 春がすみたてるやいづこみよしの、よしの、山に雪はふりつ、　よみ人不知

新古 みよしの、山かきくもり雪ふればふるもとの里は打しぐれつ、　俊惠

是の雪はふりつ、〳〵〳〵の心也麓の里は打しぐれつ、〳〵〳〵の心にてともに間斷なきて、ろなり

物をふたついひて両方にかけるつ、あり

古 山さくらわが見にくれば春がすみ峰にも尾にも立かくしつ、　よみ人不知

同 あら玉の年の終になにごとに雪もわか身もふり増りつ、　元方

此心は峰にも立かくしつ尾にも立かくしつなり又雪もふりまさりつ我身もふりまさりつの意にて両方へかゝるてにはなり

上へて、ろのかへるつ、あり

古 戀しねとそるわざならしぬば玉のよるはそがらに夢にみえつ、　よみ人不知

程とふるて、ろのつ、あり　これはたとへばけふもちりつ、といふはけふもちりつきのふもちりつと程とふる意なり

古 なつごろもきて幾日にか成ぬらんのこれる花はけふも散つ、　道濟

同 かよひてし宿の道芝かれ〳〵にあとなき霜の結れつ、　俊成女

右にあげたる古歌をよく〳〵かんがへ合そべし尤つ、どまりは古人もたやすくはよむべからぬと沙汰しをかれたれば功積りたるうへならではさまとき也

●てにはより詞につゞけたる格

てにはとうたのことばに云かけてよめる事あり

古 あひみまくほしは數なく有ながら人につきなみまとひ社すれ　ありとも

此歌ほしきの心を星に云かけたるなり

かくとだに云やはいぶきのさしも草さしもしらじなもゆるを思を　實方

是はいふを伊吹によせてよみたればそむべき詞をにごりてつゞけたり

古 けさはしもおきけんかたもしらざりつ思ひ出るぞ消てかなしき　大江千里

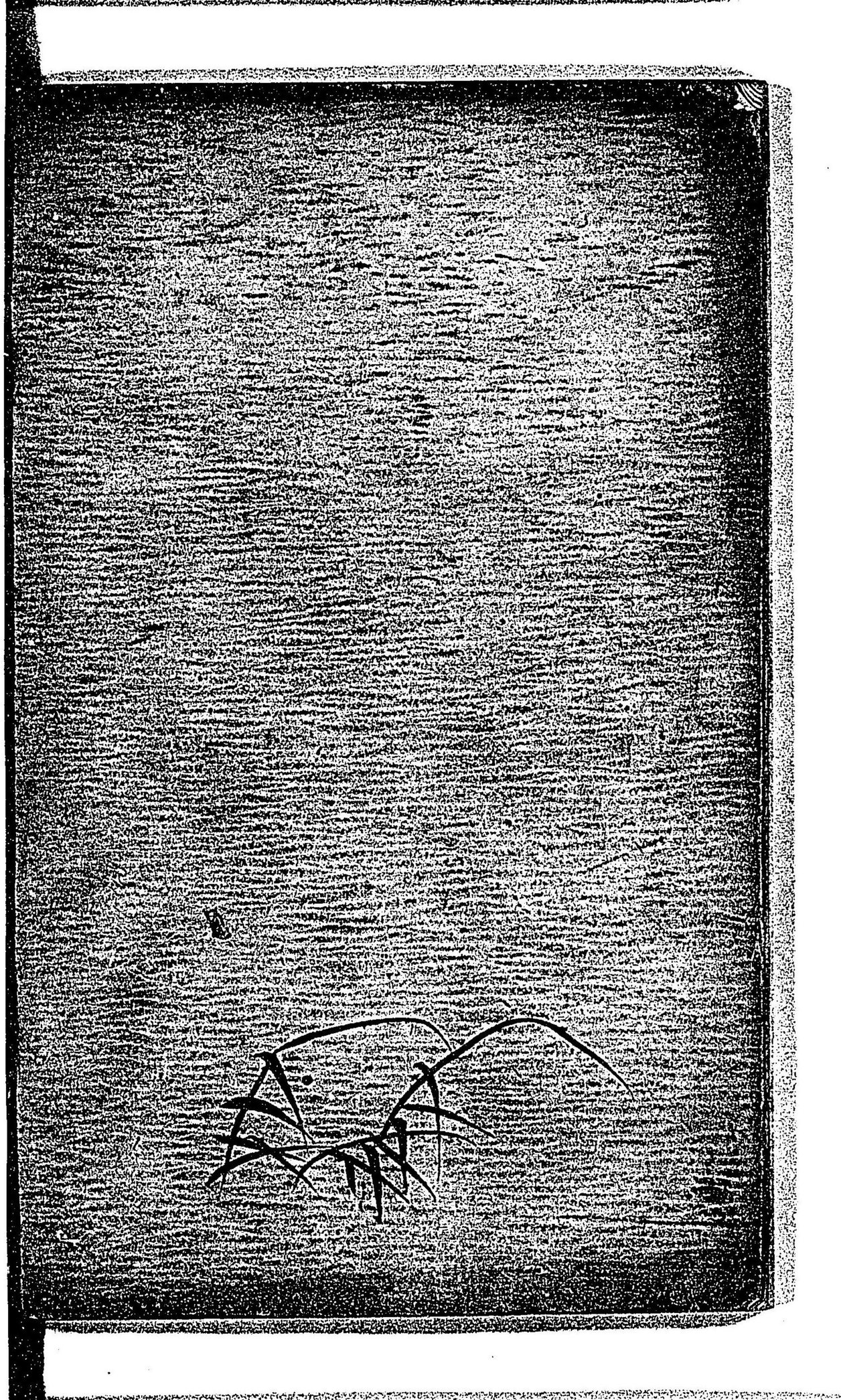
しものてにはを霜の心にしてよめり

右てにをはの詠格かき〳〵多かれどもさるゝつゞくとのふたつをよく〳〵辨へば自ら道に入るべし猶むつかしきてにはは師傳をうけてよむべし

和歌吳竹集終

明治廿五年七月卅一日印刷
明治廿五年八月三日出版

定價金六拾五錢

發行者　大阪市東區內本町二丁目百卅九番屋敷　藤谷虎三

印刷者　大阪市西區靱下通一丁目四十八番屋敷　瀨戸清次郎